

### 第3回市民公益活動の推進に係る施策検討部会

1. 開催日時 平成23年6月2日(木) 14:00~16:00
2. 場 所 福岡市役所15階 第4特別会議室
3. 議 題 (1) 市民公益活動の推進に係る施策について(答申)素案について  
(2) 審議
4. 出席者 (出席委員5名)  
大谷委員、大脇委員、加留部委員、空委員、森田委員  
(オブザーバー2名)  
福岡市NPO・ボランティア交流センターあすみんセンター長 長田  
福岡市NPO・ボランティア交流センターあすみん事務局長 鋪田
5. 傍聴者数 なし
6. 議事概要

(委員) NPOの情報開示・発信基盤の整備が必要だということ自体は、誰が考えても当たり前のことだと思うが、わからないのは、何が問題だということと、何が必要かということが分からない。私の感覚からいくと、認定NPOのホームページを見たりすると、NPOの情報発信というのはものすごく手の込んだことをされていて、非常によくわかる。でも、他方で情報開示が全然できていないという話があるのか。どこが主に問題なのか。

(事務局) 情報については、非常に情報発信しているNPO法人は情報発信しているが、おそらく法人の間に相当差があって、すごくやられている法人、とりわけ認定NPO法人は、構成上も団体としての基盤も充実しているということで、非常に情報発信をされていると思う。しかしながら、調査によると、実際に市民の側からすると、情報が不十分である、活動の実態がわかるような情報がないという声が非常に多くある。また、どういったところからの情報を入手したいかということに関しては、全ての団体のホームページをチェックするというでもいいわけですが、情報があふれ返っているというのが現代の情報に関する問題であるので、市のホームページや広報媒体、あるいは新聞とかテレビといったところで、法人が確認できたり、あるいは比較できたり、法人の活動がもう少しわかりやすく、一覧性を持って見るのができないかというのが、おそらく調査の結果から出てくる市民の声、問題だろうと考えている。

あるべき姿として、NPOは、市民が市民公益活動に参画する、そして社会に参画し、つながっていくということを推進する受け皿というか、それを実現する重要な存在、担い手であると考えている。このNPOが市民から広く認知され理解され、そして活動がわかることで、そこに参画するということに結びつけていきたい。

そう考えると、現状というのは、望ましい水準には至っていないということなので、その部分について、個々の法人が情報を発信していくということが第一義的には重要ですが、行政としてもそれをある程度まとめて、わかりやすく市民が閲覧し、参照し、そしてその活動に参画していく、そのきっかけになるようことを、情報開示・発信基盤というところで実現していきたい。

(委員) 今の話は、課題としてちゃんと置いておく必要がある。

それは、実際やっていて感じることで、NPOの数も増えてきて、取り組む分野や課題も多様になってきているというのはあるが、まだ一部の動きでしかないと感じている。

子どもに関する課題ということ言うと、非常に切実かつ深刻な解決すべき問題は多いし、ニーズとしてもまだまだあると思っているが、それを真正面から自らの課題にして取り組むNPOというのは非常に少ないし、小さくもあるので、発信をしても、なかなか市民の共通課題になり得ないという問題があると思う。

それはNPO自身が努力しなくてはならない問題ではあるが、もう一つ全体としての環境が押し上げられるということが必要だと思う。

新しい公共の担い手として、切実にこれは必要とされているものと思うが、それが少しでも早く社会全体として解決に向かうためには、基盤を上げていくということが大事だし、多くの市民が自らの課題としてとらえることが大事。

NPO自身の課題としては、自らの基盤をいかにつくっていくかというのは、資金や人材だったりする。それをどのように構築していくのかというのが共通の基本課題だが、そのためには、もっと発信していくべきで、発信力を強めていき、それが多くの市民の共感を得て、共感が支援になり、基盤づくりに結びつくという、その力をもっと意識的につけなければいけないのではないかな。

私自身が関わった幾つかのNPOでも、100%近い寄附で成り立っているNPOと、公的な補助を主な資金源にしているNPOと、事業を生み出し、その事業収入で事務所を借り、職員を雇用しているところがあって、3つのタイプを同時に経験している。

ただ、補助にしても、事業にしても、いつまでもそれが続くとは言えない。そうした場合、根本的な課題は何かといったら、多くの市民が共感して支えるということで、今はうまくいっているように見えるようなNPOでも、それをしなければだめではないかと思っている。

それには、今この課題が大きな社会的課題であると、例えば、虐待等色々な状況の中で親と一緒に暮らせない子どもたちが家庭的な環境で育つ仕組みをつくろうということに取り組んでいるが、そういう課題というのは、ほんの少し前まで行政課題だと市民は皆、思っていた。虐待事件や何かが起きた時に、皆、心を痛めるのは同だが、その後の子どもがどうなっていくかということに関心の外になってしまうという状況だった。でも、大事なはその子のその後の人生をどう支えるかということではないかということはずっとアピールして、このNPOはそれに取り組んでいる、どうぞ支えてくださいということを発信している。

一つのNPOだけの努力では限界があるということは非常に感じているし、社会全体としての関心をどう引きつけるかとか、寄附しようという気持ちに変えていくことができるかということだろうと思う。

(委員) 市民が市民活動に参画していく状態、NPOが自立的に継続的に展開されるとか、共働ということを考えていった時には、全体的にNPOを知らしめる、もしくは共働の場というのを、お祭りとして、何かそういうことをしたらいいのではないかな。

例えば、共働提案制度の報告会だったり、あすみんフェアだったり、色々なものがやられている。その場に企業や、大学、一般の方等、皆に来ていただいて、そこで寄附が受けられるようなことをやると、一石二鳥。ずっとやり続けることが非常に重要ではないかなというふうに感じている。NPOも頑張っているし、地域も頑張っている。それぞれに頑張っていて、お互いに知らないというのは意味がないと思う。

(委員) 「これは行政はどうかかわっているのか」と企業はよく聞く。風土というか、状況として、NPOそのものだけ見て価値を認める自信がないというのはあると思う。だから、行政はどう見ているのか、どう関わっているのかみたいなこと、その辺りは、基盤づくりを考える上では、何か役割があるのではないかなと思う。

(委員) 大学で学生が色々な行政的な課題をテーマにした時、NPOを調べてみたほうがいいよと言うと、彼らは調べきれない。その課題に対してどんなNPOがあるか、学生はまずネットから入っていくので、その検索ができないというか、取っかかりがない。例えば課題を入れても、GoogleのトップにNPOが出るわけではないので、どんどん検索を進めていっても、なかなかNPOにたどり着かないし、福岡にどれだけのNPOがどんな課題解決のためにあるのかという全体像をつかむのが難しい。あすみんのことも知らない。あすみんにもひっかからない。学生がそういう気持ちを持った時に、取っかかりがない。

- (委員) NPOを支援するNPOというのが幾つか出てきている。  
寄附集めのためのネットを開くと、まず分野が「子ども」「環境」「教育」など出て、そこをクリックすると、またさらに分化して、どういう団体があるというので、それでどんどん入っていけるようなものがあるという。そういうのも基盤づくりになる。  
そういった情報基盤に乗せてもらおうと思って、NPOが色々工夫して発信するというのは、NPO側の努力としてしなければいけないこと。いかに引きつける力を持つかということ。
- (委員) NPOが持っている活動の実績がある。そういうものも放り込んだ状態で検索をかけて、このNPOと、このNPOはこの課題に対してはかなり近い位置にあるとか、行政の〇〇局の〇〇課がやっていることは、このNPOと距離が近いとか、そういう構築をするというのも、つくれるかもしれない。そういう距離をはかって、図化するというのがある。
- (委員) SPYSEE (スパイシー) といって、その人を検索すると、その人に関係のある人達が、相関図が図式化されて。
- (委員) ネットを使つての基盤整備というのは可能性が大きいと思う。
- (委員) 基盤整備ということが、システムを全部動かし始める一番基礎になる基盤づくりという意義があるということと、市が主体となってやるということと、一覧性を持って見せるという、そこは要素として入っていたほうが良いと思う。
- (委員) 確かに今回、新しいビジョンを市がつくることに関しても、フェイスブックや、ツイッター等とも連動させてやっていこうということで、特に若い世代の人たちが関心を持っている。関心呼び起こす一つの入り口としては、紙媒体を中心とした、今までのアナログ的な発信の仕方と、ネットという異空間で軸を越えられるような両論やっていく。今後の方向としては、多分ネットの比率のほうが上がらざるを得ない。  
実際に私も、NPO活動で色々な支援を受ける時に、ある意味ネット審査と言っているのかと思うぐらいに、ホームページを見られている。ホームページの中身がちゃんと最新に更新されているかどうか等、そのあたりで問い合わせが入ったり、「ここは更新されてないみたいだけど」という指摘を受けたりということがあった。ある面、ホームページ、ウェブサイトというのが常にオープンになっている履歴書、審査書というか、身上調査書みたいなものになっていくのかなというのを体感した。  
HPを見ている市民からすると、なおのことそれしか情報がわからないので、そこで、例えば更新日を見たら2001年だったとすると「この団体は10年前から何もしていないのか」と、当然そう判断すると思う。
- (委員) NPO活動支援基金の寄附に関しては、現状の寄附の仕方が納付書でやられているということだったので、それでは集まらないと思う。だから、ネット寄附とか、何かそういう新しい枠組みはつくらないと集まらない。
- (委員) オンラインで寄附するという仕組みがもっと簡単にできるような工夫は必要ではないかと思う。  
まず、わかりやすい、人を引きつけるメッセージを出して、それで、寄附しようという気持ちを動かして、それでクリックして、寄附へと飛んでいけるまでのづくりが、あまり色々読まなくてもいいように、簡単にするという整備が、まだまだできていないというのがある。  
決済カードが限られていたり、面倒な寄附フォームになっていたりというので、途中で「やめた」という気分になるというのがある。  
ただ、オンラインだけじゃなくて、実際にはもっとたくさんの課題があると思う。
- (委員) 電話をかけたなら幾ら寄付とかもある。
- (委員) コンビニ決済等色々ある。
- (委員) 納付書だけの今のやり方よりは、少し何か幅が必要なのではないかと思う。
- (委員) 他にも、マイルやポイント等を寄附するというのはいかがでしょうか。  
何百ポイント、何千ポイントあって、失効するポイント分を全部寄附に回すというのがある。

- (委員) 全日空のマイルや、TSUTAYAのTポイントの寄付等。  
持っているものを手放すだけでいい、流れそうなポイントを手放すことが力になるという感じ。  
ポイントは見えないお金で、結構ばかにならないもの。行政がどこと提携するかといったら難しい話かもしれないが、企業と提携して、そこが入り口になって、色々なポイントを基金に持っていくというやり方というのはあるかもしれない。
- (委員) 行政ができるかどうかは別だが、例えば電器量販店がやっているみたいに、1回行ってアクセスするとポイントがたまるというものもある。
- (委員) ログインするたびにポイントがもらえる、ホームページを立ち上げると、ポイントがもらえる等もある。
- (委員) 何らかの価値を別の価値に転換するという考え方だと思うので、あとは何かそこに通訳的な役割が入って、気楽さのような、ハードルを下げるような主体があると、もう少し広がる可能性が出てくる。そこをやり方としてどこまで基金に盛り込めるか、提携できるか。
- (委員) 地域通貨のような形でとらえるというのではないか。
- (委員) NPOの活動支援基金の、補助率と補助上限回数数の設定というのがある。これは、補助の上限回数について、NPOの活動支援基金にいつも同じところが応募してきているということを非常に感じるので、最高2回までとか、何か上限回数みたいなものというのには要するという気はする。
- (委員) 未来永劫的に出るというわけでもないので、回数制限を設けたらいいかと思う。  
私も今、幾つかの自治体で補助金の審査をやっているが、そこでも回数制限はやっている。その考え方は二つあって、一つは、例えば23年度に1回手を挙げたら、それから3年間連続まではいいという考え方で、年で連続で考えるケースと、3回までいいという累計で考えるケースがある。
- (委員) 若年期におけるNPO・ボランティア体験活動の機会の創出のところは、NPOが、デザインキャラバンといって、小学校を毎年1校ずつ、デザインがどう社会貢献しているか実体験を子どもたち向けに丸一日使ってやっている。総合的学習が今後どうなるのかわからないが、そういうものに組み込んでいくとか。NPOはたくさん参画することで、「今日はこんな人達が来て、こんなことをやったら」子どもが情報を親に伝えて、つながっていく。これは多分、若年期だけではなくて、高等教育にも要するという気がする。
- (委員) プロボノについて、社会貢献の仕組みとして企業がプロボノチームを派遣するというの、今とても有効な時期に入っているという気がする。それは、NPO自身の運営課題でもいいし、パワーアップするという課題でもいいと思うが、そのためにどうしたらいいのかという突破口を開くために、スキルを持った企業がチームを派遣するということは、そのNPOだけではなくて、企業にとっても、とてもいいと感じる。ぜひ実現のための働きかけを企業にしたらいいと思っている。NPOにとっても、企業にとっても、両方にとってプラスになるのではないかと思う。これからの社会貢献の形として非常にいいと思う。
- (委員) 今回の震災でも、三菱商事が毎週連続で20人近いメンバーを現地に派遣していて、戻ってくる度に、どういう課題があるのかを会社に報告していた。そして三菱商事は自らがNPOを支援するためのプログラムをつくって募集をした。  
ポイントは、社員が現地に行ったということと、行って直接ものを見聞きして、それを感じて、どうにかしないといけないというメッセージが会社中に伝わったことと、それを組織としてちゃんと認知したということ。  
プロボノはあくまで個人レベルでは結構やっている人はいる。でも、会社がそれを認めてくれるか、組織としてそれを認知してくれるかどうかは、プロボノにとっては危ういところがあって、逆に「そんな暇があったら仕事をしろ」等、色々なことを言われて心がなえたとかいう人も知っている。
- (委員) 企業が派遣するというのと、個人での参加では大きな違い。

(委員) 個人でやっていることの後追いでいいので、企業がそれをオーケーだと見てあげられるかどうか。組織自体がそれを認知することが非常に大事で、それによって継続性が担保されやすいと思う。

NPO活動支援基金による助成の出し方に関連して、今回の震災でまた一つ変わってきたのは、赤い羽根共同募金が初めてNPOに対する支援金で人件費を認め、今回の助成プログラムは、人件費を全面的に認めると変わってきた。歴史が変わった。

だから、基金の出口のお金の出し方の範囲をどんなふうに柔軟に、どこまで広げられるのかということ。しかし、のべつ幕なし人件費といったら、それはまた違うかもしれないので、一定のシェア率ではないけれども、どこまでが事業でどこまでが運営かというのを、例えば、半々まではいいとか、そういうのはあっていいと思う。

(打ザバー) あすみんの役割をどうしていくのか。先日、あすみんフェアの実行委員会を開いたが、あすみんフェアの実行委員会のメンバーの中に一般市民も入れようという意見がでた。

あすみんフェアの目的は、いわゆる関心がある人のマッチングということと、ボランティアの活動の発表の場ということで、市民を巻き込むということ。だから、ボランティアがやっている事業のPRと、一緒に参加していただける関心を持った人とのマッチングという部分が重要ではないだろうかと言っていて、そういう形のプログラムを考えている。

地域とNPOの共働相談会というのも同じような話で、地域とつなぐという形だと思う。ボランティアには色々な活動形態があるから、ボランティアをボランティアで支援する組織もある。いわゆるボランティアが地域のボランティアと一緒にやって活動しているところもある。地域と地域を結ぶ中間支援組織をあすみんが担う。

あすみんが箱物の中だけで業務をするのではなくて、活動してある土俵に行つてつなぐという形が一番大事だと思っている。

(委員) 私は、あすみんの最初の基本計画をつくる段階から関わらせていただいていたので、常に頭の中には、あすみんが目指しているのは、基本計画に書いてある姿というのがある。それは、段階的にやって、最初はボランティアや、NPOの人たちのよりどころになってもらいたいというのがあるが、先々は老若男女を問わず、年代を問わず、ボランティアとコミュニティをつなげていくという役どころを担ってもらいたいというのが一番にある。

それが、徐々に、時代とともに、例えば学生の利用が非常に増えてきたり、地域の人達もあすみんに登録するようになったり、間もなく10年となろうとしているところで、そういう足がかりができたと思っている。

期待しているのは、あすみんというのは一つの固定した場所、空間。そこにスタッフが常駐をして、そこに色々な人達が相談にやってくる。そうすると1年365日の事実と心象風景があり、それが1年、2年、3年、5年と積み上がっていくと、色々な変化が見えてくると思う。昔に比べればこうなった、最近はこの人が多いとか、こういう電話が急に増えてきたとか、定点観測をしているからこそ見えることがあると思う。そこから、今、福岡というまちはこういうことが起ころうとしているのではないかと、こういうことが気になるとかというような、少し風をつかむような発信というのを非常に期待している。

それが、NPO、ボランティアだけの世界を対象にしていたら見えなかったが、地域までを対象にしたり、年代が若返ってくると、まさにこんなことが起こっているということ、あすみんに来る人達の雰囲気の違いみたいなところから感じ取れるのではないと思う。そこが、物によっては課題化していくのかと思う。今回のマスタープランでも、そういう感じたところを、あすみんからも意見として発信してもらいたいという気持ちもある。

(打ザバー) ボランティアが地域とつながっていないというのは、どちらもお互いわかっていないところが随分あるので、その部分を上手につなげないといけないと感じている。公民館等につながっていないというのもある。

(委員) 私もあすみんが立ち上がった初期にかかわったが、大きな夢を託した。新しい社会の担い手として様々なNPOができて、新しい社会へと変えていくという、そのよりどころとしてのセンターというイメージ。

色々な課題があって非常に困難とは思いますが、初めの志を貫いていくセンターとしての位置を保ち続けてもらいたいと思う。

あらゆる情報があすみんに行けばわかる、今の新しい動向、NPOと行政、社会の中でのNPOの役割ということがつかめる。また、NPOが目指すところに行くためのコーディネーションというのはあすみんの大きな役割だと思う。そこでは、地域とNPO、行政とNPO、NPO同士等、色々あると思うが、そういうところが見える位置にあるところでの、あすみんのコーディネーションの役割というのはある。

ある意味、それは牽引車としての役割でもあろうと思う。

とても便利なところにあるし、会議をやらせてもらうとか、利用させてもらっており、そんなふうなつながりになっているというのは、皆、今でも期待していることと思う。

場所だけではない、そういう機能を期待したいということだと思う。

(委員) NPO・ボランティア交流センターというのが何だかわからない。NPOや、ボランティア活動をしている人は当然わかるが、一般の人は、あすみんが何だかわからない。だから、NPO・ボランティア交流センターというよりも、まちづくりセンターみたいなもので、NPOもあれば、ボランティアもあれば、行政もある、まちもあるという、まちづくりに関して、まちづくり110番みたいなもので、あすみんに行けば全体のアウトラインとコーディネーションの内容がわかるという形に持っていかないと、関係者しか入っていかない。

そういう意味でも、5階で、上にあるから、なかなか入りにくいので、もっと気楽にすっと入れるように、路面に展開して。

(委員) 祭りやフェアをやるべきだと言ったが、今の既存の仕組みで、それをやれるのはあすみんだと思う。

あすみんも通常の受付や、NPOをネットワークしていったり、そういうことは十分にできている。その次のステージというのが、中間支援組織として、地域や、企業、大学、そういったところとどんどん結びつけていくということが、現状弱いのかなと思う。

でも、もともとそういうことができる力があるということでもやられていると思うので、非常にそういう意味では期待が大きい。

祭りとか、〇〇の日とか、現状の枠組みでやれるのはあすみん。あすみんが謳ってやるというのが現実的だと思う。

そういうネットワーク、結びつけていくところを強化してほしいし、NPOだけにこだわらずに、やれるようなあるべき姿というか、役割を再定義したほうが望ましいと感じている。

(ガザバー) 一般市民に来ていただく仕掛けもしていかなければならないと思っている。

(委員) 共働の課題の掘り起こしというスタートの部分と、最後に出てくるプレゼンや事業報告という手続に市民参加をとという部分は、明らかにリンクしていて、リンクさせることで活性化する。課題の掘り起こしから、具体的な手続から全部ひっくるめてオープンにしていくことが、ひいては市民参加を促すことになって、市民参加を促したら、共働事業提案制度が活性化していくという、そういうまとめ方だとすれば、もう少し強くリンクさせたほうが良いと思う。

これを具体化する策として、常設のあすみんというのがいつもあるというのと、起爆剤としてのお祭りという、この二本立てがこのシステムを動かしていくための機動力というか、動力になると思う。常設施設、それから単発のイベントという構造になるのかと。

それから、市担当課の自主性、主体性を発揮しやすいという部分で、共働事業提案制度の中の要改善点として上げられているが、これはこの枠をもう少し超えて、共働事業提案制度というものがうまくいったとして、あるいはもっと究極的に制度がなくてもうまく共働できるような近未来

を見据えて、各担当課が独自に主体的に積極的に共働というものを自分で発案して動かしていくという、その姿を書いているので、共働事業提案制度の枠内なのだが、もっと大きい枠で共働の推進についての中で、先を見据えた話にしてもいい。

(委員) 行政が、共働というものを継続的に推進していく、担保していくためには、内部でどういう取り組みをしなければいけないか。

例えば、共働事業提案制度で実際に提案があり、ところが、たまたまタイミングが早過ぎたとか、何かの理由で採択されなかった提案がある。でも、採択されなかった提案というのは決してゼロではなくて、早過ぎたとか、十分に練り込まれなかったとか、受け入れられなかったというだけで、数年後には、大きな課題になっているかもしれないというネタ帳かもしれない。

それを、例えば全庁OAみたいなところに置いておいて、「うちの課ではこんなことが実は3年前にあった」ということが引き継がれていくと、「それは今、大きな課題になっている。数年前、こういうふう提案を出してきてくれたNPOがいた」というだけでも、何か残せるものがあるのではないか。その時のタイミングではアウトだったかもしれないが、2年後、3年後に、大きな課題になっていたという時に、組む相手を探していて、以前こういう団体、NPOがいたということがあるのではないかと思う。その時は無理だったとしても、実績が引き継がれていくということはいいと思う。

一方で、採択された事業について、共働事業実施終了後、その後どうなったということを知りたいと思う。事業が終わって、その後うまくいっているのか？という振り返りをやっておくと、歯どめになるという気がする。

(委員) 共働のアーカイブ化というか、ちゃんと情報がどこでもとれて、どんな提案があった、こういう状況で成果が出た、その後どうなったというのが、常にアーカイブされていくということは大事。行政としての施策を検討する時にも、参考にもなると思う。

(委員) それが先駆性であったり、課題をまずいち早く提供する側としてのNPOの役割。だから、共働事業提案制度の流れのタイミングに乗るか乗らないかは勝った負けたではなくて、大事なのは、そこに提案してきたこと。それは不採択になっても、決してゼロになるわけではなく、提案されたことそのものは残って行って、後々行政が何かやる時のヒントにもなるし、何しろ提案する主体がいるということはゼロからのスタートではないということで、ゼロから役所の中で組み立てるのはわけが違うので、その時に「あのNPOに相談に行ってみよう」と、何かいいスタートラインに立てるのではないかという気がする。

(委員) おそらくNPOのほうは、採択される云々よりも、結果にかかわらず、やるのだと思う。一緒にやるかどうかということだけ。

(事務局) ただし、知的財産というか、企業秘密的なところもあるかもしれないので、不採択事業の内容を全てオープンにするかどうかというのは、そのやり方について検討や工夫が必要かもしれない。

(委員) そういった機能も、あずみにそういうアーカイブ機能みたいなものが入ってくれば、全体のセンターになる。行政側のセンターにもなる。

不採択事業については、NPOの承諾を得られれば閲覧できるとしていてもいい。

(委員) 自分たちの存在を知ってもらうとか、こういう課題が社会にあるということを知ってもらいたいということで、提案団体が公開することを望むのであれば、公開すればいいし、その選択ができるようにすれば、NPOの情報発信の一つのルートが開ける可能性もあり得る。

(委員) NPO活動支援基金の部分の補助上限回数の話が、NPOの活動促進についての文脈で語られているが、何回も採択されるような団体というのは、いいアイデアを持っていて、うまく事業を遂行するわけだから、お金を有効に使って、社会の問題解決につなげてくれるとなると、2回もらったからもう終了というのは何かもったいないなという気がして、これはどう位置づけたいか。

(委員) 基金でやっている支援・補助という形でやっているスタイルと、共働事業提案制度の共催スタイ

ルは、切り分けていいのではないかと思う。

特に、共働事業提案制度は課題が中心なので、何をやるかが非常に重要。誰がというところは、むしろ基金の方ということで、制度をそういう2つにクリアに性格づけするというのもあるかもしれない。

そうなると、立ち上げ支援的なところが、意図として強くなるのは基金の方。

- (委員) あとはやりながら色々な課題が新たに見えてくるし、柔軟にその課題を整理しながらやればいい。動き出すことが大事ということと、絵に描いた餅にならないために、その実現を保証するために、どういシステムがあればいいのかということ。
- (委員) 何をするにしてもそうだが、直列型ではなく、有機的なネットワークをいかにつくっていくかということが、ぜひ欲しいと思う。
- (委員) 共働というのを「一緒にやること」って言うようにしている。一緒にやるというは何かというと、3点あって、一つは「一人でやらない」ということ、次に「一人でさせない」ということ、あとは「一人にさせない」ということ。
- (ガザバー) 定点観測という発言を聞きいて、基本に立ち返って、あすみんの役割というものをもう一回確認させていただいた。震災以降、あすみんのやり方も少しずつ変わってきたと思っているので、これをまた違った形に転化できるようなことができればいいと思っている。